

この度、在イスタンブール総領事を拝命し、10月25日に着任いたしました。

外務省入省後、トルコでの語学研修を経てアンカラの日本国大使館を皮切りに、在外ではイスタンブール、豪州（シドニー）、パキスタン（イスラマバード）及び国連代表部（NY）で勤務して参りました。また、本省では報道関連業務に加え、PKO法案、ワシントン条約（CITES）、地球温暖化に関わるCOP3及びパリ協定（COP21）などを担当するとともに、G8洞爺湖サミット事務局次長なども勤めさせていただきました。さらに直近では衆議院国際部で勤務させていただきました。このようなこれまでの職務経験を当地での業務にも活かしていければ幸いと考えております。

皆様もご覧になったかもしれませんが、日土合作の映画「海難1890」（2015年東映）でも描かれた日本とトルコの伝統的な強い絆は、その後も、1999年8月17日のイズミット大地震での日本の支援、さらには2011年3月11日の東日本大震災に際するトルコの支援という形においても益々揺るぎないものとなっています。さらに、近年のトルコ経済の躍進及び国際的な影響力の拡大などを考えますと、当地で総領事として勤務させていただくことは大きな光栄であるとともに、その責務の重さも強く感じる所以となっております。

当館の管轄するトルコ西部計18県はトルコのUNESCO世界遺産（計18）のうち9つを擁し、トルコGDP全体の約6割を占めるなど、トルコの文化、経済の中心ともいべき地域となっており、日系企業の大部分及び在留邦人の多くの方々も当館管轄地域にお住まいです。また、トルコへの進出企業数もほぼ右肩上がりの増加傾向にあり、当館管轄地域の重要性はさらに高まってきていると言えるでしょう。特に、イスタンブールは古代からビザンチウム、コンスタンチノープル、そしてイスタンブールと都市の名前の変遷はありましたが、千年以上に亘り大国の首都であったという世界史的にも希有な歴史と文化豊かな素晴らしい都市です。最近ではエルドアン大統領もイスタンブールについて「歴史上絶えず戦略的に重要な位置を占めてきた」と述べ、さらに「現在トルコは世界経済で第17番目であるが、今後さらに10番目を目指す」と述べています（2018年10月29日のイスタンブール空港開港式典）。実際、トルコへの外国人訪問者数は約3千600万人（2015年）に上りますが、このうち約3分の1がイスタンブールを訪れていますし、トルコのGDP成長率もG20ではトップの7.4%（2017年）となっており、今後の成長も期待されています。

このような状況下、管内に進出されている各日系企業は、第二ボスポラス大橋（スルタン・アフメット橋）やボスポラス海峡横断鉄道（マルマライ）の建設に代表されるような素晴らしいインフラ整備事業に加え、当地における雇用創出、技術移転、第三国へのトルコ物品の

輸出などの形でトルコ経済に多大な貢献を行ってきました。さらに日系企業各社は文化活動にも協力されるなど日土関係の促進にも寄与されていることは、我々にとり大きな誇りであります。

当館は在留邦人及び邦人訪問者の保護、支援のみならず、このような当地に進出されている日系企業の皆様への支援を引き続き拡充させて参ります。また、イスタンブールから遠く離れた地域にお住まいの方々への領事サービスや皆様への安全対策のために必要な情報の迅速な発信を含む領事サービスの充実、メールにて配信している「イスタンブール ウィークリー」を通じた最新のトルコ経済、政治関連情報の提供などにより各日系企業のビジネス支援にも引き続き取り組んで参ります。当館はこれまでも「親しみやすく」「頼りにされる」総領事館を目指して参りました。これからも皆様のご意見なども踏まえつつ「親しみやすく」「頼りにされる」総領事館であるべく努力して参ります。

最後に、トルコのことわざに、人と人の出会いを大切にするという「山と山は出会わないが、人は人と出会う」(Dağ dağa kavuşmaz, insan insana kavuşur) というものがあります。日本の総領事として、このトルコのことわざを心に留め、様々な広報文化活動などを通じてトルコの皆様に対する日本紹介、日本に関する情報発信に努め、128年に及ぶ日土の友好関係の絆を一層強固なものにするべく微力ながら貢献させていただく所存です。

皆様のご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2018年10月
在イスタンブール日本国総領事
西牧 久雄